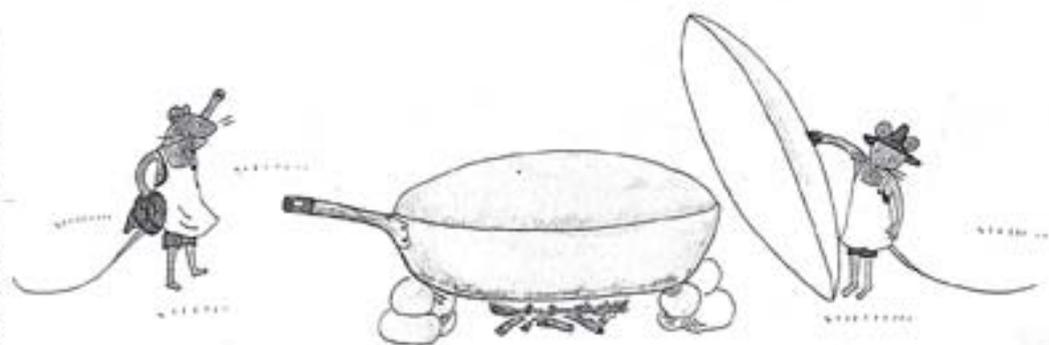


# ぐりとぐら 愛され半世紀

## 11日から、伊丹で原画展

半世紀以上にわたって、世界中の子どもたちから愛されてきた絵本「ぐりとぐら」の原画展(伊丹市文化振興財団、朝日新聞社など主催)が11日(5月31日、伊丹市宮ノ前2丁目)の伊丹市立美術館・工芸センターで開かれる。



「ぐりとぐら」原画、富城県美術館蔵  
(文・中川李枝子、絵・山脇百合子、福音館書店刊)

野ねずみの「ぐり」と「ぐら」が、大きな卵を使って「カステラ」を作り、森の動物たちと分け合う。子ども心を惹き付ける物語は、1963年、中川李枝子、山脇百合子姉妹の手から生まれた。絵本は「ぐりとぐらのおきやくさま」「ぐりとぐらのおきりぐら」など同じ主人公でシリーズ化され、7作品の累計は2400万部にのぼる。展覧会では、姉妹のデビュー作「いやいやえん」や「かえるのエルタ」の挿絵などをあわせ、170点以上の原画を展示。世界の11カ国・地域に広がる海外版も並べ、読書やぬり絵のコーナーも設けた。映画監督の宮崎駿さんと中川さんの対談映像も流す。



原画の魅力も味わえる。伊丹市立美術館の学芸員岡本梓さん(33)＝写真＝にきいた。

### ケーキのふわっふわ感 楽しめる

会場では絵本とは一味違う原画の魅力も味わえる。伊丹市立美術館の学芸員岡本梓さん(33)＝写真＝にきいた。

岡本さんはまず、色合いに注目する。「全体に淡い色で描かれていて、ケーキの黄色も薄め。ふわっふわ感がより楽しめます」  
オーバーオールと帽子の色は、ぐりは青、ぐらは赤。その間に真っ白なたまごがある。「フランス国旗と同じトッパ風のおしゃれな色彩感覚



「ぐりとぐら」の魅力はどこにあるのだろう。絵本講師の養成などに取り組む芦屋市のNPO法人「絵本で子育て」センターを訪ねた。理事長の森ゆり子さん(62)は「カステラ」を作る、食べる、みんなで分け合う。子どもたちの好きな行いが、そのままテーマになっているのが人気の秘密」とみる。理事の池田加津子さん(63)の長女も、幼いころ「ぐりとぐら」を讀むと、クッキー生地をこねたがった。「料理を作りたい」という子どもの意欲をくすぐるみたい」

### 作品の魅力「絵本で子育て」センターで聞く

大長咲子さん(48)は「嗅覚が刺激される絵本」といふ。森さんは「絵本の冒頭に出てくる『ぼくらのなまえはぐりとぐら』を歌う節回しは、家庭ごとに違う。そこにも読み聞かせのたいご味があり、広く長く愛されているのでしょ」と話す。

## 子どももの好み 満載

う。幼い頃、姉と裸り返し読み、ホットケーキの味、香りと共に記憶した。大人になって、絵本を開いた時、香りがよみがえってきたという。

原知恵さん(38)はクリスマスマスのたびに、サンタクロースが登場する「ぐりとぐらのおきやくさま」を思い出す。「帽子を脱いだサンタの髪形や、白い下着の印象が強烈でした」

(阿久沢悦子)